

幼児英語教育における実践指導について

長谷部 和子

(英文学科)

はじめに

早期英語教育がここ数年の間、特に話題になってきているが、その指導法となるとまるで教材も少なく、暗中模索の状態である。英語開始年齢や授業人数等についてもはっきりした考え方は示されていない。しかし実際子供たちに英語を教えてみて気付くことは、3歳・4歳ぐらいであれば英語を外国語として把握し日本語とは別個にマスターしていくということである。幼児は与えられるものは、何事も吸い取り紙が水を吸いこむように吸収していつてくれる。言語においてはさらにその力が強いようである。それについて言語学者である William Francis Mackey は次のように述べている。

“In the field of language learning, childhood has been called the age of form; adulthood the age of content…… The reasons advanced for starting the study of a second language as early as possible are the following: (i) greater facility in imitation, (ii) flexibility of the speech center, (iii) less interference from previous experience, (iv) lack of self-consciousness.”¹⁾

しかしいくら幼児が言語習得能力に優れているとはいえ、言語学習に必要な基本的4技能、(i) 聴く、(ii) 話す、(iii) 読む、(iv) 書く、のうち読む能力と書く能力を第二言語に要求することは、環境的、時間的にもむづかしい。そこでこれら4技能のうち、聴く、話す、という Communication としての英語を身につけさせることに重点を置きたい。「Communication としての語においては、たとえ個々の発音が多少不正確でも全体のリズムが正しければ話は相当通ずるがその逆では話は通じない。」²⁾と言われるように Communication の基本である Intona-

tion、Accent、Hearing、そして Pronunciation あるいは日本人の日常生活にあまり密着していない Gesture 等に力を注ぎたい。

偶然にも幼稚園児(5歳・6歳)に英語を教授する期会を得、子供たちが楽しんで、遊びの中で英語を学んでいく指導法を、子供たちに教えられながら発見していったのである。そのうちのいくつかを未完成ながら挙げてみたい。

1. Time & Concentration

幼稚園年中児(5歳)に対し4月下旬より英語を教え始め、毎週1回20分～30分程度行うものとする。そしてこれを年長児(6歳)になっても続け最後の2ヶ月は1週間に5回～6回、午前と午後、各60分ぐらいずつ学ぶ。この間、夏休み、春休み、冬休みはまるで英語に接しない子供たちがほとんどである。

幼児にとっての集中できうる時間というのは30分というのが最大でこれ以上続けても、席を立ったり、友だちとのおしゃべりなどで騒々しく、長時間教授することの効果は全く見られない。30分間にさえ練習とゲーム、歌等を入れるのが望ましい。年長になってからの60分というのは英語劇指導のためにクラス全体にかかる時間で、子供1人に対しては短かくて5分、長くても20分ぐらいのものである。

日崎清忠氏は外国語学習時間について次のように述べている。

「外国語の場合、1回の容量を少なくして回数を多くする方が、1回で多くの学習量をこなすよりも効果的である。たとえば1週間に3回50分授業を行なうことができるとした場合、この絶対容量を変えずに、毎回25分ずつ6回にわたって学習を行なう方が効果的である。中略、練習を主体とする外国語の場の演習などでは長時間学習することは、ほとんどその効果を期待

することはできない³⁾。幼児に対する英語教育の場合これは特に授業態度に顕著に現われる。

また羽鳥博愛氏は、「幼児の1単位時間は、20分、音声的に注意を集中してられるのは、多くの人たちの経験から中学生でも20分ぐらいまでだと言われている。したがって小学生以下の子どもたちに英語を教える一続きの時間を20分以下にしたい。何らかの関係で45分とか50分としてしかまとめて時間をとれないときは、20分ずつ2回にわけ、途中で音楽を聞かせるなり、歌わせるなり、息抜きの時間を作る必要がある⁴⁾と述べている。また疲労しない適当な学習時間としては次のようなデータがある⁵⁾。

1回の学習時間	
年齢(歳)	時間(分)
3-5	25-30
6-8	30-40
9-12	40-50
13-15	50-60
おとな	60-90

この20分-30分間に子供たちが学ぶ目標は1つである。ところが1つのものを教えるのに同じ事柄を2度、3度とくり返すだけではすぐに「またか」とか「同じ」と言って飽きてしまう。同じ教材を与えれば常に何か別の注意を引き付けるものを付随させて行うのがよい方法と考えられる。これは1つの同じ内容に飾りを付け加え、同じ教材の繰り返しをごまかす方法である。そしてこれによって子供たちは常に新鮮な表情を見せてくれるのである。それには色彩の豊かな副材-絵カード、人形、型紙、身近に手に入れられる果物とか野菜(これをとても喜ぶのであるが)が有効である。教授者は注意を引き付けておかねばならないので変化は素早く行なわねばならない。そうでないと子供はすぐに他に興味を移してしまう。ここに1つの簡単な例を挙げてみたい。

対象年齢 4歳-5歳
 授業目的 1-7までの数の練習
 Picture Cards を子供たちに示す。

Front □ □ □ □ □ □ □
 Back ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

- (1) カードの Front を示し1-7までの発音練習。
- (2) カードの Back を示し同じく1-7までの発音練習。
- (3) 指を使って同じく1-7までの発音練習。この(1)-(3)の間も子供たちは次に何が出てくるかという期待で胸は一杯である。だからカードは順序よく並べておいて次の手順に移るのに時間はかけない。
- (4) 全員で手を叩きながら1-7までの発音練習。この練習は自分たちで手を使うため、3回ぐらいまで子供たちは喜んで行う。
- (5) 手を叩きながら(4)の練習の3回目頃から徐々に歌詞を反復させ、4回目には英語の歌(Seven Steps)の Melody を付けて歌っていく。

Seven Steps⁶⁾

One, Two, Three, Four, Five, Six, Seven.
 One, Two, Three, Four, Five, Six, Seven.
 One, Two, Three, One, Two, Three.

※ Repeat

One, Two, Three, Four, Five, Six, Seven,
 ※

- (6) 子供たちは全員「Stand up」の号令に従い立ち、Partner を見つけ、お互いに向かい合う。そしてテープから流れる。あるいは教授者による歌に合わせ動作を混じえて歌の練習をする。この動作は子供たち2人が手を叩きあうものなので数の概念に役立つと思う。

この間におよそ20分間、(1)→(2)→(3)→(4)→(5)に移項するのにほとんど説明は必要ない。子供たちの模倣の習性により、教授者の発音どおり、そして動作のように真似てくれるのである。

2. Speaking Drills

A. Pronunciation

子供たちは幼稚園で2年間英語に接するのであるが、最初の段階では英語独自の音に慣れさすということに重点を置く。Mackey も発音の習得について次のように述べている。

“Before the learner starts drills in oral expression it is important for him to develop an adequate pronunciation of the language. This is better done at the beginning, for every word the learner utters makes his pronunciation of its sounds more and more a habit. If he should develop a faulty pronunciation, correcting it can be very difficult and most timeconsuming... It is not necessary, however, that the learner should be able to pronounce all the sounds correctly before he is allowed to speak... The main thing is that the learner's incorrect pronunciation should not become a habit... For this, special phonetic exercises will be needed.”⁷⁾

日本語には存在しないいくつかの音に焦点をあて、子供たちが不自然さを感じないでその英語の音を発せられる練習方法のいくつかを挙げてみたい。

(a) 摩擦音 /f・v/

「fは無声音、vは有声音である。下の唇を上⁸⁾の歯で軽く接触し、息をその間から出す。」⁸⁾ /f/ の場合 Melody を付けて、「唇かんで /fə/, /fə/, /fə/, Four Five, Four Five, Four Five Five. 等」⁹⁾ これは特に人差し指で下唇を指しながら行うのであるが1週間に一度の練習を2ヶ月ほど続けると人差し指を下唇に当てるだけで子供たちは自分たちの発音に気を付けるようになる。

(b) 摩擦音 /θ・ð/

「舌尖を上¹⁰⁾の前歯に軽く触れさせ歯と舌の間から息・声を出す。」¹⁰⁾ /θ/ の場合 /f/ の場合と同じ Melody を付けて、舌をかんで /θə/, /θə/, /θə/, Three, Three, Three, Three, Three, Three, T Three. 等。/fə/ と /θə/ の両方を組み合わせて、「唇かんで舌かんで /fə/, /θə/, /θə/, Fine, thank you, Fine, thank you, Fine, thak you, Thank you. 等」¹¹⁾

(c) 歯茎音 /t, d/

舌の先を上¹²⁾の歯茎につけて息を止め、日本語の「タ」を言うときと同じように息を破裂させると /t/, 息を出せば /d/. この練習は、/tu, tu, tu, tu, tu, tu, du, du, du, du, du, du, / とかなり早く、かなり数多く練習させた方が子供たちの興味を引く。さらに Tea という語はよく子供たちに知られていて、口の両端に指をあてて引張るように見せて /ti:/ と発音させることは子供たちも喜び効果がある。

(d) 半母音 /m, w/

日本人の発音で外人が聞きとりにくいとされるものの中で見落としがちなのがこれである。/M/ は wh- 疑問文に使われることが多く無声音で /w/ は we, our 等に使われる。日本入はこの両方を同様に発音することが多い。「w/ の場合は唇をひよっとこのように出して発音するとよい。wool, wood 等は唇を思いきり前につき出しておいてもう一度 /v/ を言うようにするのがよい。」¹²⁾

(e) 鼻音 /m, n, ŋ/

鼻音の音の出し方を口に出して子供たちに理解させることは難しく、子供たちの聴力に訴えたほうが効果がある。そして /ŋ/ の練習には歌を使うようにしている。

例：¹³⁾ Are you sleeping?

Are yuo sleeping? Are you sleeping?

Brother John, Brother John.

Morning bells are ringing,

Morning bells are ringing.

Ding, Dong, Ding, Ding, Dong, Ding.

発音指導の際はまず子供たちに教授者の口を示し、見せることである。もちろんごく簡単に説明をするが、これをくどく繰り返せば英語嫌いになる可能性も否めない。その他に日本人の苦手とする流音 /l, r/ 等もあるがかなりの説明を要する発音はできうる限り子供たちの聴力に頼るようにしている。

B. Pronunciation, Accent & Stress.

英語を Communication として活用する場合音調が特に重要である。「英語の音調には独自の形式と意味があるが、それらを正確に把握し、

また正しく表現できる必要がある。英文の音調は逆S字型にあらわれ、日本語は凸型になる¹⁴⁾と言われる。英語の音調に慣れさせるためには英文を子供たちの前で何度も口に出し耳に聞いて違和感を持たせないようにしたい。子供たちは最初目の前にいる人間が日本語以外の言葉を話すのを聞いた時、驚きの表情を示す。場合によっては恐怖感さえも抱く。子供によっては「変だ」と言って笑いの対象にする。しかしそれごとく初期の段階で見られる現象であってだんだんと慣れ自分たちは英語を学んでいるのだという意識を持ち、喜んで真似るようになるのである。子供たちにとっての英語の音調とかアクセントは一種の音感のようなもので年齢が低いほうが有利である。聴覚記憶が抜群に優れているのである。最近の調査によると、「居住地域によってもっとも変化しやすいのは語彙で、次が音声と音韻、もっとも変化しにくいのはアクセントだということらしい。そして10歳までに住んでいた地域のアクセントは身につけてしまっただけでその後の生活によって左右されにくいという。こういった意味で、10歳以前に英語らしい発音を子供たちに仕込むということは大変な価値があるのである。¹⁵⁾」

子供たちに文の強勢を無理なく理解させる方法として、教授者は音楽の指揮者のように手を使うことを勧めたい。すなわち強く話す箇所には手を高く上げ、弱く話す箇所には、手を低く用いて、手の動きと同時に英文を言う。あるいはタン、タン、タンなどと手拍子でリズムを取ると耳で強弱を捕え易い。

例：Teacher: What's your name?
 タン、タン、タン。
 (Teacherの手の動きへ)
 Children: What's your name?
 アクセントの時も同様に
 Teacher: C'offee.
 (Teacherの手の動きへ)
 Children: C'offee.

この練習は うまく言えるようになるまで何回も

繰り返して練習することである。子供たちの反復練習のためには教授者の発音が一番適している。録音テープの反復の間の取られているものはある程度練習を積んだ経験を持つ生徒には望ましいのであって幼児に強要すれば英語嫌いを増やす1つの原因とさえなりうる。幼児には生の声が一番よいようである。

1. Songs, Gestures & Chant

一般的に幼稚園では数多くの歌を子供たちに教える。年少児でも1年を経ると20や30の歌は軽く歌いこなすようである。普段日常生活の中ではとても使いこなせないような長い文でも間違えることなく歌っている。歌は音や音の群を反復するための絶好の教材である。一授業に1つか2つの歌、そして1ヶ月を通して1つの歌を続けることを勧めたい。たとえ子供たちがうまく歌えないとしても同じ歌を一度に何度も歌わせることは避けたほうがよいように思われる。それよりも毎日1回ずつ1つの歌を歌ったほうがより効果が見られる。じっと同じ姿勢を保つことの苦手な子供には、歌いながら動作、振りを付けると歌を練習する回数が度重なっても気にならないようでとても喜んで歌うのである。

子供には歌と動作の関係で次のようなおもしろい習性が見られる。子供たちは毎朝保育の始まりに先生の弾くピアノに合わせておじぎをしたり、手を叩いたりして日本語の「朝のあいさつ」の歌を歌う。この歌を昼間の子供が騒いでふざけている時に前ぶれもなく突然弾いたとする。ほとんどの子供たちは毎朝のようにおじぎをし、手を叩いて歌い始めるのである。反対にピアノなし、歌なしで同じ調子の動作をくり返したとする。子供たちはいつも自分たちがその動作をしながら歌う歌「朝のあいさつ」を口ずさんでいるのである。「体のどこかを動かしておぼえたものは運動記憶と言われていて、なかなか忘れない。十数年離れていても、その気になればけっこうやることのできる水泳や、自転車乗りがこの好例である。¹⁶⁾」英語も言語的手段にだけ頼るのではなく非言語的手段(動作・表情)をも活用して行なったらよいのではないだろうか。¹⁷⁾ Old English Nursery Rhyme として今も

親しまれている London Bridge 等は動作・ゲームを含む歌として活用できる。その他にも動作を伴い子供の喜ぶものとして、「Head and Shoulders, Knees and Toes; Mother Finger; Rain, Rain, Go Away; Ring Around a Rosy; Potato Song」¹⁸⁾等があるがこの他にもただ起立して歌うのではなく、歌に関連した動作、あるいは調子のあう動作を振り付けるとよい。歌は、音や音の群を反復するための絶好の教材である。同様に単語と文の反復練習としてふさわしいのが単調な調子で語り続け、詠唱形式をとる Chant である。文にあう一定のリズム、強弱をつけさせると言い易い。また子供たちの集中力が散漫し授業に注目させる事が難しい時がある。殊に天気の良い日で外で元気に遊び、教室に戻ってきた時等である。そんな時に軽く、Listen to the lesson. Listen to the lesson. See the lesson. と言うのである。何度も耳にするうち子供たちもくり返して言うようになる。あるいは子ども1人だけに注意したい場合：

Sweet Taro chan, Sweet Taro chan, Go back to your seat and sit down. Or, Stand up straight. と注意する。子どもは自分の名前が呼ばれたことで気付き他の子どもは一緒になって Chant を言い出す。子どもの音感記憶のすばらしさには目をみはるものがあるが、子どもは自分の知っている Melody に自分の言葉を自由に付けたり、加えたり、自分なりに創作して歌う能力を持ち合わせている。だから既存する Melody に英語の歌詞を付け歌ってもよいのである。これについて Mackey はいくつかの注意点を述べている。

“Although songs are a fruitful device for the repetition sounds and sound-groups, it is necessary to check whether their text conforms to the level and utility of the language taught. Does the rhythm of the music correspond to the natural rhythm of the sentence? Or is the stress placed on a normally unstressed syllable? Are the structures used all current and frequent? Or is the song an occasion for drilling obsolete structures?”¹⁹⁾

ここに The Farmer in the Dell.²⁰⁾ という歌がある。

The farmer in the dell, The farmer in the dell, High-o-, the derry, oh, The farmer in the dell.

この歌を十分に練習させた後 The driver in the car, The pilot in the plane, The teacher in the school, The doctor in the hospital. の Picture cards を見せ、十分に Pronunciation Practice を行い The farmer in the dell. の部分に置き換えることができる。

そして Sing Together.²¹⁾ は次のようである。

Sing, sing, together, Merrily, merrily, sing.

Sing, sing, together, Merrily, merrily, sing.

Sing, sing, sing, sing.

Sing → Walk → Run → Jump と変化させることも可能である。

4. Pictures & Games

子供たちから自発的に言葉を発せさせるには絵を使うと良い。普通教室内では見せることのできない動物や品物、実際に再現するのが不可能な動作を見せることができるからである。まさに「百聞は一見にしかず」である。

“...it is sometimes quicker to flash a new picture before the class than to set up a situation. The more different pictures you have, the more different situations you can show.”²²⁾

とも言っているようにいろいろな場面を変えたり、設定したりするのに貴重な授業時間をさかなくてすむ。これらの絵はクラス全体から眺められるくらいの大サイズの紙に、特に具象化しないで現実的に描かれるのが望ましい。うまくなくてもよいが色は塗ってあったほうが子供たちの喜びを増す。子供たちは1年間にかんりの単語をこなすが1時限では多くても5語か7語までで、これも1ヶ月ぐらひは続けて教える必要がある。最終的には単語だけなら年中児でも1年間に100語ぐらひは覚える。その他には、かなり大きな Wall Pictures 等も効果がある。最近のビデオテレビ等も使い方次第では大きな効果を発揮する。

5語か10語の単語が覚えられれば、そのまま文体の練習に移っていくことが可能になる。すなわち子供たちがある程度の量の単語を覚えてしまえば、話をさせる手段として、その覚えた単語を使うことがふさわしい。例えば、「くも」(Spider)の絵、あるいは模造品を子供たちに見せて、What's this? と尋ね、Spider と答えさせる。(子供たちは、これ以前に Spider の単語は学習しているものとする。)これが、a spider になり It's a spider. と変化して、次の新しい課程を学習していく。子供たちは、絵よりも模造品、模造品よりも本物を好む。身近な物で手に入りやすい果物等は本物のほうがよい。次に挙げるのはゴム製の「くも」を用い、とても子供たちの喜んだ授業例である。

対象年齢	5歳-6歳
授業目的	疑問詞 Who の概念を掴む。
Props	ゴム製の Spider
Teacher:	(Spider を示し)What's this?
Children:	It's a spider (Taro に渡し)
Teacher:	Who has a spider? Taro, Taro chan has. (Hanako に渡し)
Teacher:	Who has a spider? Hanako chan has.

この練習を数回くり返す間、子供たちには繰り返しを要求しないで、何かを話す子供たちにだけ言わせておく。何度も練習する間に Teacher が、Who has a spider? というだけで、何を尋ねられているかを理解し答えてくれる。但し、初期の段階では spider を持つ子供の名前を言うだけである。これはさらに1つのゲームとなる。子供たちに5人-15人くらいの輪を作ってもらい、中心に1人の鬼を置き、まわりの子供たちは、両手で拍子を取りながら Who has a spider? を連呼する。その間、鬼は目をつむり、顔をかくしてすわっている。その他の子供たちは、自分たちで Who has a spider? を連呼しながら Spider を次から次へと後手に回していく。中

心の鬼か、あるいは Teacher が Stop をかければ Spider の手渡しを止め、それを持つ子供は素速く後手に隠す。鬼は立ち上り、誰が持っているかを捜す。そして Spider を持っていた子供が次の鬼となる。ゲームの方法に慣れるまでは、日本語の応答を黙認するが Do you have a spider? Yes. No. の問答を学習し、使わせてみる。この文を口に出せない子供にも、少なくとも Spider? という語だけは練習させる。数回のゲームの練習で子供たちはうまく応答できるようになる。この場合の Pronunciation, 顔の表情は、まさに会話そのものである。このように1つの文型をゲーム等に結びつけて、何度も訓練することが子供の会話、すなわち口頭表現を上達させる。幼稚園の年中児や年長児は、まだ日本語の読み書きが充分にはできない。子供たちは英文を読んだり、書いたりすることによって進歩することはできないのである。何か、目新しい物を見て注意を引き付けられ、自分から何かを話したい、「これは英語で何と言うのだろうか。」という疑問を子供たちの心の中に沸き上がらせることによって、より進歩が望めるのではないか。

5. Dramatization

子供は飛んだり、跳ねたりすることが大好きなのである。10分以上も黙って静かにすわっていることなんて、できなくて普通である。「幼児の言語指導は、見たり、さわったり、聞いたりという感覚器官を動員し、遊びという中でこそ育つものが多いことを忘れてはならない。そのために、いろいろなものや遊びを工夫し、友だちとのかかわり合いなどを含めて考えることが必要である。」²³⁾ こういった子供たちの性質を利用しながら、英語を学習していく良い方法はないのだろうか。そして実際に英語の使われる状況を教える方法はないものだろうか。大部分の子供たちは、英語という言語がどういう Gesture を使って、どういう時に使われているのか、というのを知りはしないのが、ほとんどなのである。また、こういった英語をどのように使うかということが子供の頃に少しでも理解できれば羞恥心を持たないで英語を活用できる期会を

もっと多く持つことができるのではないかと考えたのである。Mackey は Speech through Actions の中で、“Another way to give the class practice in speaking, while holding its interest, is to let them perform little skits and short plays.”²⁴⁾と言っている。実際多くの中学校や高校では文化祭などで毎年多くの英語劇が演じられている。しかし、5歳や6歳の子供たちに果して英語劇はどうであろうか。もちろん子供たちに中学生や高校生と同じ程度のものをと考えるのは不可能であるが、日常生活のママゴト的なものを劇化することはできないものだろうかと考えてみた。たいていのおとなは幼い時、友だちを相手か、あるいは、両親、兄弟、姉妹を相手に自分の身近にある出来事を真似てみたことがあるのではないだろうか。まずは、ママゴト的な練習から、除々に1つのStoryを持っているものへと進ませていったらよいのである。すなわち、子供たちはクラスの中でいろいろな生きた日常会話を、ママゴト的に訓練され、覚え、その延長線で英語劇を行い、「それによって Speaking や Hearing を進歩させ Communication の一手段として英語を考える態度を無意識のうちに彼等の内部に形成させるのが望ましい²⁵⁾」教室での寸劇のいくつかを挙げてみたい。

例Ⅰ：Props:Hankerchief

(Taro 君が Hankerchief を落す。
これを Ken 君が拾って、)

Ken: Is this your hankerchief?

Taro: Yes. Thank you.

(同じ状況で、)

Ken: Is this your hankerchief?

Taro: No.

Ken: Oh, sorry.

あるいは、子供たちの喜ぶ、お店屋さんごっこを寸劇に応用してみる。

例Ⅱ：Props:Candy & Cookie, Confectionary

(お菓子屋さんの)看板

Shop keeper: Hello, may I help you?

Taro: I want a candy.

Shop keeper: Here are some.

(子供は1つ取る)

Taro: How much is it?

Shop keeper: Ten yen.

Taro: Here you are.

(お金を払いながら)

Shop keeper: Thank you. Come again.

例Ⅲ：Props:2つのコップ

Mother: Milk or Juice.

Taro: Juice, please.

Mother: Here's your juice. Say, thank you.

Taro: Thank you.

例Ⅱはかなり難しいものであるが根気よく教え込めば必ず覚える。特に子供たちは果物屋さん、お菓子屋さん、すなわち自分たちが普段大好物だと思っているものを売っている店を好むからである。例Ⅲの Mother の役は Teacher とか、かなり話せる子供がふさわしい。

こういった寸劇の後、子供たちは本格的な劇と呼ばれるものに挑戦して行く。一度英語劇を体験した子供たちに驚かされるのは、英語を話すことに対する自信が満ちあふれてくることである。そして、それをすぐに、無意識のうちに実生活へ取り入れて使っている。現在まで英語劇は二回上演したのであるがその二回のリハーサル中、そして上演後によく耳にした文は、

おもしろくないとき It's no fun.

さようならのとき See you later.

うれしい時 I'm so happy. or We are so happy.

おなかがすいた時 I'm hungry. or We are so hungry.

給食の時 I smell' Miso shiru' over there.

何かを捜さねばならない時 Let's look for...

クラスの友だちがうるさい時 Be quiet.

等である。自信を持って英語を話すようになる1つの大きな理由は、大きな声で何度も練習す

ることにより発音も進歩し、Native Speakerの人に理解されているという喜びからくるものと、何度も練習するために英語的な言いまわしに口が慣れてくるという点を挙げたい。「日本語とはちがう子音の発音を子どもに耳で聞かせて繰り返えさせるとするのは仲々難しいものである。ところがリハーサルで繰り返し練習しているうちに自然に生徒の身につき、他の場面でも無意識のうちに正しい発音をするようになってくるのである。²⁶⁾

子供たちは毎年卒園直前の3月初旬に英語劇の発表会を行うのであるが、本格的な練習に入るのは冬休み明けの1月初旬である。子供たちの英語劇は入園してから卒園までの総決算となるので、それまで学んだことがすべて準備ともなりうる。劇に挿入する歌等の練習は一般的な行事の終了する11月下旬から入るのである。

英語劇での指導の中心は音声面と動きにあり、音声面においては、あくまでも発音に重点を置くべきで、次には大きな美しい声にするのが重要なポイントとなる。子供たちは、既にそのまま、とても美しい、かわいい声を持っている。彼らに必要なのは、ボリュームのある明瞭な発音と、彼らの持っている資質をいかに、うまく出してやれるかという点にかかっている。まずボリュームについてであるが、これには毎回冬休み以降1つのExerciseを行なう。子供たちに、指を3本出させ、それを口の中に縦に入れさせて、このくらい大きな口を開けるのが必要だということを教える。そしてクラス全員の子供たちに両足を少し開いた姿勢で立たせ、発声練習を行なうのである。部屋の窓は閉め、「窓ガラスがピンピン揺れるくらい大きな声を出しましょう」と言って、全員が「A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, 中略 X, Y, Z.」と区切りの良い所で切りながら、正しい発音をする。26文字を2回ほど発声練習するが、この時子供たちは、お復の上に手を置いて腹式呼吸になるよう努める。

幼稚園児と中・高生の劇指導で見られる大きな違いは幼稚園児には、いわゆる人前で体を動かす、何かを見せることに対して恥ずかしさが

見られないことである。子供たちは Show Offなのである。が、一方、動作・感情を表現させるのに子供たちの英文からの内容判断による動き、(Movement)をあまり期待できないという点が見られる。ところが劇指導においては、音声面と同じように動作・感情を表現する Movement が重要な位置を占める。佐野正之は動きの言語について次のように述べている。

「子供は不安を感じると身体を疎める。嬉しい時には、自然にジャンプする。これらは特別な目的に奉仕する動きではなく、内的な感情が自ずから身体の動きとなって、表現されたものだと考えられる。すなわち、身体が話しているわけである。一方動きを観察する側には、子供の気持ちが、その動きによってわかる。ですからここにも一種の Communication が生じているのである。²⁷⁾元来体を動かすことの好きな子供たちだから Movement を子供と一諸に行うことが一番良い方法なのである。子供たちは喜んで行う。また Movement を子供たちが自分で行うことによって自分たちが、今、何を英語で話しているのかを理解させることができる。これは1つの意味が日本語ではこうなのだと言明するより、はるかに実践力を伴い効果がある。例えば、後の Play の中の一文である、Let's look for food. を教える場合、意味など子どもに伝える必要はまるでない。意味を1、2回教えたところで覚えている子供は10人のうち1人ぐらいのものである。ところがリハーサル中に片手を目の上にかざし、物を捜す動作を示し、それを3、4人で行いながら英文、Let's look for food.を言った場合、その動作を行なった3、4人、そして見ていた子供たちほとんど全員が後々まで、その文をとってもよく覚えている。

英語劇の脚本については、セリフを内容を損なわない程度に簡単にするのが望ましい。4 Syllable から8 Syllable くらいの程度の文章である。「一般的に英文の記憶できる長さをしらべると、中学1年生で13シラブル程度、2年生で18シラブル程度、3年生で23シラブル程度が比較的困難を感じることなしに実施できる。²⁸⁾」また、日常会話で多く使われる短縮形は利用す

るほうがより理想的な Communication に近づけられるし、文をも短くする。やむなく長文を使わなければならない時は接続詞を用い、単文化する。英文の記憶訓練法としては、田崎清忠の言う「ピラミッド型練習」(Pyramid Exercise)を用いると著しい効果が見られる。

例 (覚えるべき文)

Tom, a big mean cat, is waiting for the mice.

(練習の順序)

mean cat

a big mean cat

waiting

waiting for

Tom, a big mean cat,

Tom, a big mean cat, is waiting for.

Tom, a big mean cat, is waiting for the mice.

というように Teacher の後に繰り返させ、数回練習すればよい。そしてこれを毎日根気よく練習することである。このように幼児の英語劇指導には 1 対 1 での対話指導が望ましく、多くても 3、4 人の Group に分け、その中での 1 対 1 が良い。これは、Teacher と 2 人だけの緊張感を少なくし、友だちの練習風景を見ることによって子供個人をも力づけるからである。

後の挙げる劇の脚本は Aesop の The mice in Council.²⁹⁾ を劇化したものである。ただ原話では、誰が猫に鈴を付けるのかと長老のねずみが聞いたところで終るが、より子供たちに夢を持たせるために、ねずみが猫に鈴を付けるのに成功するというように書き換えてみた。英文の訂正は Mrs. Sarah Williams の助言を得た。

Belling the Cat.

CHARACTERS:

Tom, a big mean cat.

Jerry, a clever mouse.

3 little mice. 18 Other mice.

6 Narrators.

() 内は Syllable の数を示す。

SCENE ONE

Setting: There is a hole in the wall. (7)
The mouse family live there. (7) Tom, a big mean cat is waiting for the mice.

He loved to eat mice. (6)

3 little mice: We are hungry. (4)

Jerry & mice: We are hungry, too. (5)

Mice: Tom's sleeping now. SONG I (4)

Jerry & mice: Let's look for food. (4)

Jerry: Hurry! Hurry! (2)(2)

Mice: We are very hungry. (6)

Mice: Let's go this way. (4)

Jerry & mice: No, let's go that way. (5)

I smell cheese over there. (6)

Mice: Shhh. Be quiet. We'll wake Tom.

(3)(3)

Tom: Ho-hum.

Jerry & mice: Hurry! Hurry! (2)(2)

Mice: That was close! Too close! (3)(2)

3 little mice: Where's our food? We are hungry. (3)(4)

We are very, very hungry. (8)

Jerry & mice: Oh, dear…… (2)

Tom: Next time I'll catch you and eat you. SONG II (8)

Mice: We hate that cat. (4)

Mice: We can't walk. (3)

Mice: We can't look for food. (5)

Jerry & mice: Let's do something. (4)

Father mouse: Let's have a meeting. (5)

Mother mouse: That's a good idea. (5)

3 little mice: We are hungry. Where's our food? (4)(3)

SCENE TWO

Setting: That night the mouse family met in the living room. (13) The aunts and uncles came. (6) All the cousins came. (5)

2 old mice: Be quiet. We have a problem.

(3)(5)

Let's do something. (4)

Mice: I know. Let's tie up cat. (2)(5)

Mice: No. We don't have a strong rope. (1)(6)

Mice: Let's ask the dog. (4)

Mice: The dog's outside. He can't help us. (2)(2)

Jerry: Let's tie a bell around the cat's neck. (9)

Mice: How clever! That's a very good idea. (3)(7)

All mice: We can hear Tom with the bell. (7)

3 little mice: We are hungry. (4)

All mice: Hooray, Hooray! (2)(2)

Jerry & mice: We need a bell. (4)

Mice: We need a ribbon. (5)

Mice: We have a bell. It's under the bed. (4)(5)

We'll get it. (3)

Mice: We have a ribbon. It's in the box. (5)(4)

We'll get it. (3)

Mice: We have a bell and a ribbon. (8)

Who's going to bell the cat? SONG III (7)

Jerry: I will. (2)

All mice: You are very brave. (5)

SCENE THREE

Setting: Now Jerry has a bell with a ribbon. (10) Then he walks to sleeping Tom and he bells the cat. (12)

Jerry: I did it. (3)

All mice: You did it. (3)

Mice: Now we can walk. (4)

Mice: We can sleep. (3)

Mice: We can look for food. (5)

3 little mice: We'll have lots to eat. SONG IV (5)

THE CURTAIN FALLS

SONG I : Are you sleeping?
Are you sleeping? Are you
sleeping? a big bad cat, a big
bad cat. We are very hungry,
we are very hungry. Shhh,

Shhh, Shhh. Shhh, Shhh, Shhh.

SONG II : I bite like a tiger.

I bite like a tiger, I bite like
a tiger. I bite like a tiger.
I bite like a tiger. I bite like
a tiger, meaooh, meaooh.

SONG III : Who's afraid of the big bad cat?
Who's afraid of the big bad cat?
the big bad cat, the big bad cat.
Who's afraid of the big bad cat?
Tra, la, la, la, la,

SONG IV : Tom
Tom, Tom, big bad Tom.
We can hear you,
We can hear you.
We can walk, We can sleep.
We can walk, We can sleep.
Tom, Tom, big bad Tom.
We can walk, We can sleep.

6. おわりに

この劇は Narrator も含めて総勢22名で上演されている。ほとんどのセリフは2、3名の Group で話される。子供の英語劇発表を見て驚かされるのは彼らが英語と動作を間違えることなく上演することである。しかし、そうだからといってさらに上の段階へ望み何かを課すことはしたくない。これは子供にとって遊びの1つに過ぎないのである。我々は、多くを子供たちに期待しないで、子供たちの内から沸き上る英語への興味を待つだけである。そして子供たちが英語を通して日本以外の国々にも興味を持つようになってくれたら、それは素晴らしい。

英語劇指導に関して特別御便宜をいただいた東海女子短大付属第二幼稚園の諸先生方に対し心から感謝いたします。

注

- (1) Mackey, William Francis: Language Teaching Analysis, Longmans 1965, p. 121
- (2) 伊藤健三・島岡丘・村田勇三郎『英語学大系 等12巻 英語学と英語教育』大修館, 1982年, p. 437

- (3) 田崎清忠『英語教育理論』大修館, 1978年, p. 81
- (4) 羽鳥博愛「早期英語教育と学校英語教育一指導法とその問題点」『現代英語教育』研究社, 1981年11月号, p. 7
- (5) 辰野千寿『学習心理学総説』金子書房, 1975年, p. 576
- (6) 『世界の子供の歌』コーティナ・アカデミー, 1977年, p.6
- (7) Mackey, W. F., op. cit., p.423
- (8) Fisher, Hilda B.: Improving Voice and Articulation, Houghton Mifflin Company 1966, p. 318
- (9) Kitamura Elizabeth: Toro Method; 1981 JALT Meeting
- (10) Fisher, H., op. cit., p. 289
- (11) Kitamura, E., op.cit., JALT
- (12) 伊藤健三他(前出), p. 223
- (13) 『英語の歌』小学館, 1969年, pp. 16-17
- (14) 伊藤健三他(前出), p. 427
- (15) 羽鳥博愛(前出), pp. 6-7
- (16) 同上, p. 7
- (17) 関口準『新幼児教育シリーズ, 言語-その指導と実際』同文書院, 1979年, p. 25
- (18) Dakin, Julian: Songs and Rhymes for the Teaching of English, Longmans 1980
- (19) Mackey, W. F., op. cit., p. 266
- (20) 『英語の歌』(前出), pp. 20-21
- (21) 『世界の子供の歌』(前出), pp. 2-3
- (22) Mackey, W. F., op. cit., p. 427
- (23) 関口準(前出), p. 25
- (24) Mackey, W. F., op. cit., p. 427
- (25) 佐野正之『英語劇のすすめ』大修館, 1977年, p.9
- (26) 同上, p. 9
- (27) 同上, p. 67
- (28) 田崎清忠(前出), p. 92
- (29) 寺西武夫訳注 『Æsop's Fables』研究社, 1978年 p. 20